航海は人を磨く

海へ Sea Dream

The Magazine for Your Marine Life

シー・ドリーム

VOL.30 KAZIムック

THE FIRST VERSE

明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤

外交官たちが築いた
中禅寺湖の
ヨット文化

Special Style Issue

天才時計師・フランク・ミュラー氏の華麗なるボートライフ

HOLIDAYS AT THE SEA & BEACH

乗馬&マリンライフが楽しめる

「マリーナ河芸」の休日

Sea Dream Gallery

"魚のきらめき"を描く魚譜画家

長嶋祐成

ATTERSEE WEEK
AUSTRIAN CLASSIC 2019

アルプスの湖上を帆走る

AQUA / GALEON 510 SKYDECK / SWAN 48

アルプスの湖上を帆走る

ATTERSEE WEEK
AUSTRIAN CLASSIC 2019

船齢70年以上のヨットが集結する オーストリア、アッター湖のクラシックレガッタ

ザルツブルクの東、アッター湖の湖畔にある「ユニオン・ヨットクラブ・アッターゼー」。ここで毎年開催される1950年以前に建造されたヨットによるクラシックレガッタに、「琵琶湖ヨット倶楽部」の有志が参加した。美しい山々に囲まれた湖の上を滑るように走るクラシックヨットの姿は、まさに芸術品だ。

写真・文=青木英明（琵琶湖ヨット倶楽部会長）
photos & text by Hideaki Aoki (Chairman of Biwako Yacht Club)

美しいソンダー級のレース風景

戦闘的で美しい木造レーシングボート

ハンザヨレ級。西村・小松原組でヤードスティックレースに参加

琵琶湖で現存する木造艇〈EZ〉が参加のきっかけ

7月30日～8月4日の間、オーストリアのアッター湖で開催された「ATERSEE WEEK AUSTRIAN CLASSIC 2019」に、琵琶湖ヨット倶楽部(BYC)のメンバー有志5人で参加した。このレースは1950年以前に建造されたオールドボートが参加できるもので、全艇がウッドウンボート、マストも半数はウッドだ。各艇はそれぞれ昔の構造のまま見事にレストアされており、ニスの光沢で今でもきれいに光っている。

実はBYCも戦前のオールウッドのヨットを動態保存していて、それがこのレースへの参加につながった。そのいきさつから説明しよう。

1936年のベルリンオリンピックに我がBYC部員(同志社YCの創設メンバーでもある)故・吉本善多が出場し、その際に次回1940年に開催予定だった東京オリンピックへの参加を目指して、レース艇の図面を持ち帰り、日本でその艇を建造した。これが〈EZ〉と称するEINHEITSZEHNER(アインハイッツツェーナー)で、BYCでは、このオールドボートを年一度のクラブ主管レースで帆走させている。〈EZ〉は今年で船齢80年、現役で水上を帆走するヨットとしては日本最古の艇といわれている。

琵琶湖で活躍中の〈EZ〉

2008年、〈EZ〉をきっかけに、このクラスをドイツとオーストリアで復活させるべくアーカイブワークをしているArtur Vlasaty氏と懇意になり、このクラシックレースの存在を知ることになり、主催クラブから招へいを受けたというわけだ。2010年にも一度参加しており、今回は2度目となる。

タイムマシンで過去に戻ったかのようなレースシーン

右：古老の夫婦でゆったりとセーリング(〈EZ〉と同型艇)
右下：女性だけのチームも……

レースは前半がクラス別、後半はヤードスティックを用いてのハンディキャップレース。われわれは、クラス別ではオリンピアヨレ級、ヤードスティックレースではハンザヨレ級という艇を借りてレースに参加した。

風は概して弱くノーレースの日もあったが、湖水でのクラシックヨットレースを存分に楽しむことができた。成績は振るわなかったが、同じ趣味を持つ仲間として、地元のセーラーたちは遠方からの参加者を温かくもてなしてくれた。表彰式での熱烈な歓迎ぶりは忘れられないもので、ヨッティングという一生涯の楽しみの世界共通言語を堪能するひとときだった。

このレースで注目すべきはソンダー級という40フィートのキールボート。細くて長い、しかもフリーボードが低い美艇で、巨大なセールを展開する。約100年前の構造をそのままにレストアされており、ニスで仕上げた、それは美しいボートで、まさに“貴婦人”だ。湖面をこの艇を含むウッドボートで埋め尽くすレースの模様は、まるでタイムマシンで過去に戻ったかのような素晴らしい光景だ。

ヤードスティックレースの光景

上：湖面に山肌が映る中、静かなセーリングを堪能する
下：アルプスの風景にお似合いの木造ボート

絵画の中でセーリング そんな気分を満喫

アッター湖はオーストリア西部、アルプス山麓に点在する氷河湖の一つで、オーストリア最大の湖である。ホストのユニオン・ヨットクラブ・アッターゼー（UYCAS）は、会員数1,000人のヨットクラブで、オーストリア最大のヨットレース基地。湖畔のクラブハウスに面して多くのポンツーンが設置され、大荒れすることのない湖だから、水と建物が近いとても魅力的なヨットクラブだ。

セーリングは湖水散策のような気分で、静かにゆったりとヨッティングライフを楽しむことができ、心が満たされる。画家のクリムトが好んで住み、多くの風景画を残した地、そんな絵画の世界に入り込んだような、時を忘れる優雅なセーリングシーンがここにあった。

琵琶湖ヨット倶楽部は1922年創設、3年後には100周年を迎える。昭和初期にIYRUの国際ヨット競技規則を導入して日本ヨット競技の普及に尽力してきた。現在は月一度のクラブレースを楽しむ程度だが、先人の導きのおかげで、このようにヨットをライフワークとして楽しむコミュニティーに接することができた。まさに海（湖）のおかげです。人生の宝物を得た感慨でいっぱいのリアルな夢を見に出かけた、そんな気分の旅だった。

美しい背景と見事に溶け合うソンダー級のセーリング

ヨットクラブ玄関

湖畔のヨットクラブ、UYCAS

レース後のなごやかな表彰式

遠征に参加した面々。左端が筆者。
BYCの長谷川和之名誉会長（右から2人目）も同行